
灰色と青い空(沖神)

曇坂陽向

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色と青い空（沖神）

【Nコード】

N3750H

【作者名】

曇坂陽向

【あらすじ】

真選組の特別任務につかされた沖田。その途中で偶々出会ったのは神楽だった。暗い雨の中、沖田が知った神楽の真実とは…

雨が、降っていた。

天気予報では曇りだったのが外れたらしく、激しい雨。

人通りは少なかった。

「…何で俺がこんな仕事を…」

真選組一番隊隊長、沖田総悟は特別任務につかされていた。

（見るからに治安が悪そうだぜ…土方さんの言うとおり、確かに麻薬くらいは横行してそうでさア…）

暗く、湿った裏通りだった。しかし狭くはなかったので、曇った空

は良く見える。

そこを真っ黒い傘をさして歩いていた。

『麻葉の出どころを突き止める』という任務のため、隊服は着ず、警戒されないようにするため刀も木刀だ。

沖田は奥へ奥へと進んで行く。

「…」

下り階段。その真ん中に人が座っているのが見えた。

（こんな雨の中傘もささねえで何やってんだ…？）

影で女だということは分かった。

しかしやけに小さいので、女、というよりは少女に見えた。

「……。」階段に近づくにつれて、その少女の影の輪郭がはっきりしてくる。

（…あの髪の色…あの髪型…）

…沖田は、その輪郭に見覚えがあった。

「…チャイナ？」

「…！」

神楽だ。いつも会う度に沖田と喧嘩をしている、万事屋銀ちゃんの従業員だ。

彼女はいきなり呼ばれて驚いたのか、とっさに振り向いた。

「…何してんだア、こんなところで」

「なんだア、お前か」

神楽はその声の主が沖田だと分かったと、安心したのかまた背を向け、空を見上げた。

「…昔を思い出しちゃったアルよ。」

「は…？」

「銀ちゃんは黒いサラサラストレート長髪と茶色いモジャモジャグラサンにどっか連れて行かれたネ。

新八は三次元萌えアル。私1人置いてけぼりヨ。」

（意味わかんねえ）

「1人だし、散歩してたら雨降ってきて…雨宿りする場所探してた
らここ見つけたアル。」

「雨宿り出来てねえだろイ」

確かに神楽はずぶ濡れで、近くに雨宿りする場所なんてなかった。

「…っつかいつもは傘さしてるじゃねーか」

「…傘は家に置いてきたアル。天気予報じゃ今日は曇りだったから
ナ。」

（…曇りだったから…？）

「それよかここは治安が悪イんだ。あぶねえから出てけイ。」
沖田もいくら神楽が強いとはいえ、こんな場所に神楽を置き去りにする事はできなかった。

「いやアル。…ここで空見とくネ。」

「…出てけ」

さつきより強く言った。

「ここにいたいアル。…ここは私の故郷そっくりネ。」
神楽もさつきより強く言った。

(だから昔を思い出したって…)

「おめえの故郷…こんなとこなのか」

「こんなとこって…失礼アルな。」

「…知るかアホ」

「アホにアホ言われたくないアルアホ。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

いつもの険悪な雰囲気になりかけた。

…が。

「ちょっといいかな…君達2人。」

「「！」」

突然妙に高い男の声が聞こえた。

「……。」

「君達…孤児だね？」

「……。」

沖田も神楽も答えない。

「ははは…まあいいさ。

それより僕達と来ないかい？

高いお金がもらえるんだ。」

男は眉をピクピクさせており、不気味極まりない。

（捕まえんのもめんどくせえ…）

（人売りってゆーやつアルな…）

「…人売りは違法だぜイ」

「そういうのやめといた方がいいネ。」

「はははは…珍しく頭の良い子ども達じゃないか。

……………でもね」

すると男はゆっくりと右手を挙げた。

「……」

建物の裏から、がたいの良い男が2人出てくる。

「…頭が良いだけじゃ、生きる事は出来ないよ」

「！」

突然男2人が、沖田と神楽に向かって凄まじい勢いで走って来る。

（最終的には力ずくって訳かい）

沖田は木刀を引き抜いた。

一瞬、風が通り抜ける。

「…くあゝっ…！」

男達は全員声を出す暇もなく倒れた。

「…まったく…めんどくせえ…」

沖田の木刀はもうすでに腰の帯に収まっていた。

（かなり強く打ってやったぜィ…。そう早くは起きてこれねえだろ…）

はぁ、と小さく溜め息をつく。

「…ここにああこういう輩がうじゃうじゃいやがんだ。…分かったら出てけィ」

「だからいやだって言ってるヨ。空を見てたいネ。」

「…てめえなら身の危険は心配なさそうだが…ここは1回でも喧嘩起こしゃあ、いっくらでも他の輩が群がって来るぜィ。ややこしい事ンなる。」

（それに風邪でも引かれちゃ困る）

「……。」

それでも神楽は動かない。

「…何でそこまでここにいてえんだい？何故空を見ていたい？」

沖田は仕方無くため息混じりに聞いた。

「…お前、夜兔って知ってるアルか？」

「は？」

「夜兔族。」

「俺は今そんな意味分かんねえ質問聞いてる場合じゃ…」

「とにかく答えろ！」

「！」

いきなり神楽が振り向きもせず怒鳴った。

(なんなんディ…一体…)

「…名前くらいは聞いた事あるがねェ。知ってる事つつたら天人
ってえ事とめちやくちや強エって事くらいでさア。」

沖田は素直に答えた。

「…夜兎は…」

神楽は俯きかけていた顔をまた上げた。

「夜兎は、宇宙で最強の戦闘民族といわれているアル。」

「…そりやすげえや」

「でも夜兎族は、ただ戦闘能力が高いだけの民族じゃないネ。」

(こいつ一体何が言いたい…)

沖田はずっと神楽の後ろ姿を見ていたが、どうもいつもの神楽ではないように感じた。

「夜兎族は…どの民族よりも戦いを好む…いや、好むっていうよりは寧ろ本能…戦い自体が本能ネ。

自らの為の戦いの中でしか生きられないアル。

…簡単に言えば、戦い無しでは生きられない…そういう民族ネ。」

神楽の声は雨のせいもあってか小さく聞こえた。

「そりや…ひでえ民族だな」

「そうネ。だから夜兎はいつも1人アル。夜兎は…孤独。戦って殺

したり壊したりする事しか出来ない悲しい民族ネ。そうやって戦い続けて…今はもう数少ない民族になってしまったヨ。」

「……。」

少し沈黙が続いた。

しかし沈黙が続いていても、雨の音で静寂は掻き消された。

「お前…」

…沖田が沈黙を破った、その時。

「おい」

「「！」」

沖田の言葉は低い男の声で遮られた。

「…………。」

沖田と神楽はゆっくりと後ろを向いた。

「…だから…言ったじゃねえかい」

「…………。」

そこには、数え切れないほどの人数の大きな男達が木刀や棒、棍棒などを持って構えている。

「そのの伸せてる3人をやったのはてめえら2人だな？」

「だったら…？」

「！…まあいい。それだけ強けりゃ馬鹿高え値段で売れそうだ。しかもどちらも顔立ちがとんでもなく良いときてる…。それに娘は天

人か…。ここまで都合の良い獲物に出会ったのは初めてだぜ…」

男達は一斉に武器を構えた。

「チッ…」

（結構疲れんだぜイ…こういうの）

「ここにいる奴らはこの辺りでも強いので有名なんだぜ…」

男達は全員で一氣に襲いかかってくる。

沖田は木刀を引き抜こうとした。

……しかし。

「!？」

常人なら絶対に見えなかっただろう。

（チャイナか…）

一瞬にして半数以上が倒された。

「余計なことしてくれんじゃねーぜイ」

「お前がトロいのが悪いネ。」

神楽には少し返り血がついていた。

…が、雨ですぐに消える。

（こいつマジで女かよ……いや、女以前に天人だっけねエ…）

男達は一瞬の出来事に何が起こったのか分からず、ただ呆然として
いる。

「お…おい」

男達の中の1人が小さく声を上げた。

「なっなんだっ!!」

「あの小娘…」

「小娘がどうした!!」

「夜兎…だ」

「!!?」

（夜兎…って）

「間違いねえ！！傘は持ってねえが夜兎だ！！特徴が全部一致してやがる！！やべえ！全員殺されるぞ！！！！！」

「なっ…」

男達の表情は恐怖で引きつる。

…そして、全員が無言のまま去って行った。

「……………」

そこには、雨の音しか聞こえていなかった。

「おい、チャイ……神楽おめえ」

「総悟」

「！」

「あと言い忘れてた事があったネ…。…夜兎の特徴は…白く透き通った肌に傘…。夜兎族は太陽の光に弱いアル。だから晴れの日に空

を拝む事は出来ないネ。：こうやって：雨の日に空を仰ぐ事しか出来ないネ。」

「…」

「青くて綺麗な大空も：傘越しにしか見れないアル」

「そりゃ：悲しい民族だな」

それからまた、少しの沈黙。

「……なんか気分最悪になっちゃったアル。：お前にこんな話すんじゃないネ。」

（自分から話しといて良く言うぜイ）

「…あ、雨…」

雨が、止んだ。

「おめえ風邪引くぞ」

「……」

「ここまで暴れちゃあ隊務もできねえ。送ってやるから帰りな。」

「……でも、銀ちゃんも新八もないアル。」

「ホントてめえは旦那と眼鏡君好きだねエ。」

沖田はため息をついた。

「ほら、なんか陽も照ってきやがったし」

神楽は、空を眺めていた。

（…ん？陽が照って…）

「おっ！おい神楽！おめえ傘は！？」

「だから家に置いてきた言ったアル。」

陽はどんどん強くなる。

「俺の傘貸すから…」

「そんな真っ黒い傘御免ネ。」

神楽は更に上を向いた。

「おめえ何言ってたア…」

「私も見たいヨ！お前には分からないネ。いつも太陽が見られるんだから！太陽って本当はすごく綺麗アルよ！」

「……っ」

「…！」

沖田は、傘ごと神楽に覆い被さるようにして彼女を抱き寄せた。
神楽に当たる日光を、遮った。

「おめえに何かあったらなあ…俺が旦那にうるさく言われんでさア」

「空が見えないネ！」

「んなもん俺が代わりに見てやらァ…。俺がどれだけ空が綺麗だったか教えてやらァ…。」

雨の日には外に連れてってやるから、見るのはその空で我慢しろイ。

「

沖田はジッと神楽の青い瞳を見ていた。

「おっお前銀ちゃんみたいな事言ってるじゃねえヨ！」

神楽の顔が少し赤くなった。

「でもやっぱり1人になっちゃうアル！」

神楽はそっぽを向いた。

「俺が旦那と眼鏡君が帰ってくるまで遊んでやるから、俺で我慢しな。」

「……う…ん…。…っ、っーか顔近いアル。…キモチわるい。」

「ああ？…もう遊んでやらねえぜイ」

「っ！わっ悪かったアル！」

「んじゃ、これさして歩け。」

沖田は神楽に傘を渡した。

「お前この傘趣味悪いナ。」

「文句あんなら返せ」

「いやァ…ル…」

「！神楽っ！！」

突然神楽がフラついた。

沖田がとつさに神樂を支える。

「うあゝ…目眩があ…するネ…」

神樂は少し目を開けて沖田に訴えた。

「ったく…」

（日光に当たり過ぎたか）

「しょうがねえ、負ぶってやるから乗れ。」

沖田は傘を持ちながら、神樂に背を向け自らの背中を指差した。

「えゝ…何でお前なんかによゝ…」

「てめ、置いてきぼりにされてえのか？あ？」

「分かった！分かったからおんぶするから…」

「おい、日本語おかしいぜイ」

沖田は神樂を負ぶって歩き出した。

帰り道。

神楽は沖田の背中の上で力無く眠っていた。
晴れた空の下、沖田は傘をさして歩く。

(こいつビチャビチャ…俺まで濡れる…)

「おい神楽…。」

「…………。」

「寝たかい？」

「…………。」

「…おめえが言ってたのが夜兔っていうんなら、おめえは夜兔であ
って夜兔じゃねえ。」

おめえは人間だア。

少なくとも俺なんかよりはずっと人間さ。

殺しはおろか、壊す事もできねえ優しい人でさア。

大事なもんちゃんと守ってる、強い人だ。」

「…………。」

今日の天気予報は狂いつぱなし。

激しい雨のち、快晴。

あの雨の記憶はもう無いみたいに

空は美しく光った。

「総悟、空、綺麗アルか」

「ああ。真っ青で雲一つねえ快晴でさア」

e
n
d.

(後書き)

最後までお読みくださりありがとうございます。
感想などもらえると、すごく嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3750h/>

灰色と青い空(沖神)

2010年10月10日01時54分発行